

# 第十八回純黄賞

## 作品 水<sup>みず</sup>辺<sup>べ</sup> あお

右に贈ることを決定した

令和三年七月

コスモス短歌会

### 第十八回純黄賞の選考経過

五十歳以上の会員で入会后五年以内の新人を対象とし、今年恒例により、二〇二〇年の一月号から十二月号まで一年間のコスモス掲載作品から選考された。

まず選者団より1位から3位までの推薦を求め、高野、影山、桑原、狩野、宮里、小島、木畑、大松、田宮、津金、小山、福士、藤

野、風間、田中、橘、水上比、鈴木、原賀、水上美、大野、松尾の各氏より回答があり、被推薦者は11名であった。水辺あお44点、工藤亜希子31点、前中映21点、島夏樹・高山幸子・内藤丈子6点、中村京5点、栗山貴臣3点、印出美由紀2点、手嶋千尋・中島涼1点となり、五月十五日編集会で検討して、水辺あお氏への授賞を決定した。

### 感想

水辺あお



顔は派手だが、性格は地味だ、と思います。六十八年の半生をふりかえれば、コツコツタイプでした。

中学校時代は陸上部で、日曜日も、誰もいない校庭で一人走り、一人跳び、一人帰りました。今思うと、結構〈暗い少年〉でした。好きな言葉は「愚公、山を移す」。行き詰ったとき、いつも思い起こします。

『コスモス』に入会して以来、欠詠がないようにコツコツ歌を作り、コツコツ送りまし

た。そして、今回、賞をいただきました。うれしいです。ありがとうございます。はげみになります。これからもコツコツ歌を作ります。

### 略歴

一九五二年 東京都生まれ  
二〇一八年 コスモス短歌会入会

## 第十八回 純黄賞選考資料抜粋

第十八回純黄賞の選考のもとなつた推薦文と作品の一部を、ここに掲載する。推薦文は○印が一人分、推薦作品抄は、推薦者の挙げた作品の中から編集部が適宜抄出したが、推薦の多い作品を前のほうに掲載してある。

### 水辺あお推薦

○現代社会の動きに問題意識を持つて常に鋭い目を向けている。小動物や木を自らに巧みにたとえるなど軽妙な詠みぶりが小気味よい。

○歌の幅がたいへん広い中で、鋭い批判精神のある社会詠が光る。世の不条理を巧みな措辞で差し出し読者に考えさせる。自然詠、日常詠も味がある。

○社会へ寄せる眼差しが深い。批判的な内容の時事詠も卓越したユーモアのセンスで、ふつくと肥えた作品に仕上げている。

○全盤に社会的な目が働きつつシャープなのに、大らかな韻律だ。その個人的スケールは読者を刺激し、「言うことは言う」姿勢に醍醐味がある。

○多く詠まれた政治や社会への怒りが怒りで終らず、もはや哀

しみの域に達している所が深く心に刺さる一年だった。

○題材が多岐にわたたり、退職し老年へと向かう日々を丁寧によく取る。社会や政治家への批判は鋭く小気味よい。

○社会に向ける目は鋭く厳しいものがあるが、作品は比喩を用いるなど表現に工夫がされている。なにげない自然を詩的に表現する技が優れている。

○先行きの見えない社会へ批判的な目を向けつつも、自らの老いを重ねた詠み方に人柄が滲む。

○政治や社会を大局的に見る視野をもつ一方、退職後の穏やかな日常を掬い取つて詠む。批判精神、ユーモア感覚をもち、言葉の扱い方がうまい。

○笑いを誘うことも多い、ややゆるびた歌の底に捨て切れぬ思いが揺れる。

### 推薦作品抄

#### 水辺 あお (第十八回純黄賞)

為政者の言ひ分ばかり流しるるニュースに身銭払ふわれらから  
右岸行けば左岸にをりし鴨のやつ左岸を行けば右岸にをりぬ  
温暖化加速に皆が加担して不平等なる決壊被害

避難所の門に入れず放浪のキリストも仏陀も孔子らもまた  
壮年を終へ老年に向かふ身の氣づけばあらぬ嘴と牙

見え透いた嘘つかれても海底のなまこのごとく黙すわれらか  
わが猫の《言葉》ときどきわかるのにまつたくわからぬ首相の《言葉》

投票に行つてもあとはそれきりで十八歳はカンガルーの子  
最新鋭世界最強海軍が手作業でするフジツボの除去

被害者が加害者になる哀しみがひとつふたつと増ゆる三月  
今日もまたコロナウイルスのニュースなり想像感染したる心地す

一メートル空けるくらゐがちやうどいいハグや握手になじまぬわれは  
壇上のエリマキトカゲは嘘つきでいざとなつたら逃げだすつもり

をとこぎといふ名のすぐに折れやすき硬き木ありし昭和日本  
あかつきの蟬鳴く前のしづけさに目を閉ぢてをり櫻大樹は

のびきつたゴムの輪さらにひつばつてオリソニックの五輪が歪む  
国境を越えてしまへば台風も人種差別もひとつとなる

## 工藤亜希子推薦

○繊細で澄んだ抒情性。感情の直接的な表出を抑えた思索的な詠風。AI機器や、コロナ禍による在宅勤務を詠んでいて、現代性がある。

○優れた比喩を多用しながら、現実世界を掬いあげている。時にその視線が自らへ向かうところも魅力的である。

○詩情があつて色彩があり、豊かな歌群に惹かれる。死に、ひたと向けられたまなざしが美しい。

○言葉の持つ魅力を知り、存分にそれをして、独自の歌世界を拡げている。

○まるで家族のような口ボホン（人型ロボット）を詠んだ歌など、独自の世界を持つ。調べが柔らかく、詩的な発想も魅力。

○独自の感性を持っていて、日常をしっかりと詩的に詠む。色彩を詠んだ歌が美しく印象的。魅力的な歌が多い。

○静謐な詩情をたたえながら五感が鋭敏である。素材も現代的なものから芸術的なものと幅ひろく、比喩の巧みさが光る。

## 前中映推薦

○日常の出来事を独特のユーモアと悲哀で描く。そのバランスが良く、切り取り方が巧い。対象への眼差しが温かく心に響く。

○浪漫性と知性のうまく溶けあつた歌柄だが、群れの外の個の意識が、時に独特の眼差しを生み、世界にひとつだけの光景を展いたりする。

○繊細な感覚を持ち、対象物的確に表現する。ユーモラスで知的な歌は、独特の魅力を湛えている。

○日常のなかで見落としてしまふような事柄をすくい上げ、作品に仕上げていく。作品に触れて読者が「ああ」と静かに気づく、そんな魅力がある。

## 島夏樹推薦

○しっかりとした自然の描写を通して、人の営みや作者の心情が二重写しのように見える作品である。自然と人をつなぐ比喩表現も印象深い。

○心の柔らかさに驚く。歌がかしこまっていない。叙景歌であっても軽やかに飛躍し自らに引き付けて歌う。比喩もいい。

## 高山幸子推薦

## 工藤亜希子\*

ひつじ雲すんすん並ぶ空の下遊牧民の心で駆ける  
マトリョーシカの一番内にいるごとし打ち解けがたき人たちといて  
遠くとも近くとも見える死といふもの たそがれに漕ぐ青いぶらんこ  
人の世に濃淡あらむ今の世は濃く忌まわしき蘭の色に似る  
断捨離のごみの中よりオルゴールの「ピピピ」と脈打つごとき音聴く  
窓辺にはカーテンの綾あかるくて死という未知を想う水無月  
糸へんの文字の妖しさ綾・織・紗・縞子綸子緞子縹乱絢爛  
おそ夏に醸造されゆく刻ありて上澄みのごとき夕空に遇う

## 前中 映

カパー・袋・ポイントカード 丸善のレジにて否を三度言ひたり  
パチンコ屋入り口前に段差あり 見知らぬ人の車椅子押す  
秋風と呼ぶべきものの突端に確かに触れてゐた夜の耳  
ほくだけがエドガー橋と呼ぶ橋のなかばで冬の鯉を見てをり  
起点なく終点もなく生きてゐる山手線はくるしさうだな  
夏川の堤を越えて流れ来るしやぼん玉さへ怖るるころ  
あさがほのやうな少女がならび立つ秋葉原の街の梅雨の夕暮れ

## 島 夏樹\*

冬ちかい午後の日向の身のどこか急ぐさびしい川がせせらぐ  
からだまで葉が咲きそうなのはつ夏だ終わり知らないみどりかがやく  
灯を明るく親しい本を改めて読む夜更けまで影とふたりで  
昔から湧きつぐ夏の古井戸に老いたわたしの顔棲んでいた  
まっすぐに生きて曲つたこの背骨立ち続けるのだ「斜塔」のように

## 高山 幸子\*

団栗のあまた転がる森を行く今日の憂うつぶちぶち踏みて  
麦穂波ひろがる里を散歩する肺の襞まで緑を吸いて  
木犀の梢にあそびし雛いずこ羊歯で編みたる空の巢ひとつ

○退職後、夫と共に農作業に勤しむ日々を詠む作品が多い。どの歌も実感に裏打ちされた丁寧な表現がなされていて、対象となる人も自然も魅力的である。

○地方の田園地帯で暮らす人で、自然を素材とする歌が多く、素朴な味わいがある。七人家族で夫をはじめとする家族詠からは健やかな愛情が感じられる。

### 内藤文子推薦

○植物と風土の季節感と肉親への情愛がバランスよく詠まれている。歌に対して意欲的に取り組んでいる。

○自然と触れ合う中での生活感。数々の木や草花へ寄せる想いをゆつたりとしたリズムでしっかりと歌っている。父母への想いも美しい。

### 中村京推薦

○山里での暮らしの一齣一齣が、ユーモアのある軽やかな文体で詠まれている。発想も豊かで、歌を詠む楽しさに満ちている。

○歌はおおらかだが、天性の明るさだけではないであろう表現上の工夫と着眼点の良さに味わいがある。

### 栗山貴臣推薦

○見えないものが急に見えてくる驚きを掬い上げる。短歌が得意とする瞬間を切り取る力を生かす。

○猫を詠んだ歌が温かく、ほのぼのとする。自然詠、時事詠など少しずつ歌の幅を広げて来ている。

### 印出美由紀推薦

○歌い方にはまだいくぶんか削りなどところもあるが、果敢な表現意欲が頼もしく、将来性を感じさせる。

### 手嶋千尋推薦

○現代短歌らしい韻律に特徴がある作者。即物的に詠んでいるかに見えて、その物に心情を仮託するのが上手い。個性が際立っている。

### 中島涼推薦

○過疎の地域で農作業に従事する日々が丁寧に詠まれている。厳しい現実に向き合いながら一杯生きた姿が印象深く詠まれている。

外出を自粛する日々珈琲で世界をめぐるコナ、モカ、サントス三月ぶり学校のチャイム聞こえる畑の草とり三限目まで

### 内藤 文子

雪国に生まれしゆゑか幼きに見し月夜にも雪ふりしきる  
千年のときが過ぎてもあかねさす紫式部は越前の華  
むらさきの音符のやうな花びらの小さきハミング堅香子の花  
雪国の空はしゆるしゆる溶けだして青にとときめくわれの湖  
満天星の花の鈴鳴れ空に鳴れ亡き父を呼ぶ風の音となれ

### 中村 京

独りゐのながながし夜は子に似たる座敷わらしにあひたきものよ  
炎天下にぶらんこゆらす女の子のはめし軍手のひらひらの指  
自販機に冷えたマスクを売るといふコロナ時代の産物のひとつ

### 栗山 貴臣\*

通勤で使う時間がいらなくて朝から淹れるドリップコーヒー  
見上げれば星の輝き目に留まる自転車だけの明かりとなりて  
通勤のお供のはずの本たちが在宅の今ページ進みます

### 印出美由紀

コンクリの小さき矩形に棲む鯉の跳ねる刹那に翻る空  
塗り重ねられたるゴツホのひまはりのいづくにもなき翳を見てゐる

### 手嶋 千尋\*

マンホールの下で水流ひびきだす中村哲さんの訃報飛び込む  
一之輔の胸のあたりでへくるくるが 生配信は途切れそうになる

### 中島 涼

飼ひ犬のあふぐ目線に気づかされ時化あとの空うるこ雲見る  
対岸の藪こだまする小綬鶏のこゑ聞こえて来て梅雨明けまちか